

大学生の心理学観の構造 II

——心理学者との比較——

東 正 訓・橋 本 尚 子*・加 藤 徹・藤 本 忠 明

The Structure of University Students' Concepts of Psychology (II)

—— A Comparative Analysis Between University
Students and Psychologists ——

Masanori HIGASHI, Shoko HASHIMOTO*, Tohru KATO
and Tadaaki FUJIMOTO

1. 目 的

血液型性格占い、心理ゲーム、精神分析もどき…など、いわゆる“通俗的”心理学は、現在、若者の間にたいへんなブームをよんでいる。教養の心理学を受講する学生のなかには、“学問としての心理学”と“通俗的心理学”を混同している者が最近とみに多くなってきたようである。このような学生に対して教養の心理学の講義を担当するわれわれは、困惑させられることもしばしばである。

そこで、われわれは、このような心理学ブームのもとにある学生たちが心理学をどのような学問としてとらえているかに関心を持ち、その心理学観の構造分析をすすめてきた。その結果の一部は、東・橋本・加藤・藤本（1994）の論文にて、報告をおこなった。

さて、今回の報告は講義を担当する側にある心理学者の心理学観と、大学生の心理学観とを比較し、両者の間の認識のギャップを明らかにすることを主目的とした。また、他大学、関係諸機関の心理学者から、心理学教育の内容とあり方について、多数のご意見を寄せていただいている。それらを分類・整理した結果の報告も併せておこない、心理学教育に携わっておられ

* 本学心理学科非常勤講師

る方々の考え方を紹介して、今後の心理学教育のあり方を探るための資料としたい。

2. 大学生と心理学者の心理学観の比較分析

1. 方 法

(1) 質問紙の構成

心理学観の測定には、藤本・栗田・橋本・瀬島・東（1993）の『ワークショップ心理学』第一章 p.11 の15項目（付表1参照）をもちいた。評定は、「はい」、「やや」、「どちらでもない」、「やや」、「はい」の5段階評定でおこなった。得点化は5点から1点を割り当てることとした。採点の方向は付表1を参照していただきたい。

心理学者を対象とするアンケートには、専門領域や今後の大学における心理学の授業の内容や有り方に関する考えについても質問をおこなっている。

なお、心理学の認識論を構成する一次元である Scientist-Humanist dimension の下位項目（Kimble, 1984）のうち、行動の法則化、理解、予測と統制が可能か否かに関する認識の差異を測定する項目を翻訳してもちいたが、予備的分析の結果、本項目の信頼性および妥当性に疑問がみとめられるため、今回は分析にはもちいなかった。

(2) 調査時期と対象者

大学生を対象とした調査の一部は、1993年4月に『入門心理学』の受講生を対象として、藤本・加藤・橋本が口頭による教示を与え、集団斉一法でおこなった。心理学科2回生以上を対象とする調査は、東が同様の手続きにしたがっておこなった。このデータは、東・橋本・加藤・藤本（1994）の分析でもちいられたものと同一である。

心理学者を対象とする調査は、1994年2月に郵送法によっておこなわれた。心理学の各専門領域をなるべくカバーするように留意したが、標本抽出法は無作為抽出ではなく有意抽出によった。そこで、標本の母集団代表性を確保することは、今回、断念せざるをえなかった。

Table 1 にはこれらの調査対象者の人数構成を示した。なお、経済学科の女子学生は人数が少ないため、今回の分析には含めていない。

Table 1 被験者の構成

	心理学科 2回生以上	心理学科 1回生	社会学科	東洋文化学科	イギリス・アメリカ 語学文学科	経済学科	経営学科	心理学者
男	45	65	57	55	22	118	79	51
女	87	114	36	26	23	2	17	

Table 2 心理学観を測定する15項目の分類別平均及び心理学者群と各群との間の2乗マハラノビス汎距離

項 目	心理学科 1 回 生	心理学科 2 回生以上	社 会 学 科	東洋文化学科	英米語学 文 学 科	経 済 学 科	心 理 学 者							
	男子 女子	男子 女子	男子 女子	男子 女子	男子 女子	男子	男子 女子							
Q 1 心理学に興味がある	4.800	4.939	4.667	4.805	4.544	4.750	4.091	4.423	4.273	4.348	4.390	4.101	4.353	4.667
Q 2 心理テストに興味がある	4.585	4.719	4.178	4.552	4.105	4.722	3.909	4.462	4.318	4.565	4.339	4.038	4.706	3.902
Q 3 心理学は神秘的である	3.231	3.640	2.911	3.046	3.158	3.861	2.855	3.385	3.409	3.478	3.280	3.316	4.059	1.686
Q 4 心理学は役にたつ	4.231	4.289	3.978	4.103	3.667	4.056	3.600	3.769	3.818	3.652	3.619	3.570	3.588	4.216
Q 5 心理学は科学的である	3.954	3.781	4.022	4.115	3.351	3.500	3.436	3.500	3.227	3.217	3.093	2.962	3.294	4.118
Q 6 心理学は文系である	3.354	3.105	3.444	2.885	3.702	3.417	3.527	3.500	3.727	3.435	3.636	3.722	3.706	2.784
Q 7 血液型で性格がわかる	1.892	2.702	1.644	2.322	2.193	3.028	2.127	3.192	2.455	3.174	2.941	2.646	3.412	1.353
Q 8 心理学は占いと関係がふかい	1.923	2.360	1.533	1.655	2.211	2.667	2.509	2.462	2.545	2.913	2.475	2.595	3.882	1.588
Q 9 頭の良し悪しは知能テストでわかる	2.015	2.114	2.089	2.161	2.228	2.028	1.818	2.231	2.045	2.609	2.153	1.987	2.294	3.118
Q10 心理学を学べば、人の心を読めるようになる	2.908	2.544	2.044	2.057	2.632	2.500	2.473	2.692	3.318	3.000	2.788	2.823	2.824	2.392
Q11 心理学を学べば、相手の性格がわかるようになる	3.308	2.851	2.578	2.460	2.825	2.889	2.855	3.038	3.364	3.261	3.085	3.051	2.941	2.882
Q12 心理学を学べば、自分の心がわかるようになる	3.631	3.763	3.067	3.310	3.175	3.417	3.236	3.731	3.545	3.652	3.288	3.291	2.765	3.039
Q13 心理学を学べば、自分の悔みが解決できる	2.723	3.026	2.289	2.494	2.263	2.472	2.255	2.692	2.545	2.522	2.398	2.316	2.235	2.588
Q14 心理学を学べば、人づきあいがうまくなれる	2.954	3.140	2.533	2.644	2.842	2.472	2.382	2.462	2.909	2.826	2.932	2.810	2.882	2.451
Q15 心理学を学べば、異性にもてる方法がわかる	2.354	2.246	1.667	1.609	2.035	1.861	1.782	2.038	2.273	2.304	2.169	2.177	1.941	2.039
心理学者群の重心からの二乗マハラノビス汎距離	3.383	4.792	2.670	3.284	4.259	6.202	4.820	5.983	6.144	6.311	5.910	6.675	9.847	—

2. 結果と解釈

(1) 心理学者群と学生群の間の 2 乗マハラノビス汎距離

まず、心理学者と各学科学生との心理学観の違いを量的に表現するために、われわれは各群の 15 個のアンケート項目の平均間の隔たりを 2 乗マハラノビス汎距離をもちいて計測した (Table 2 参照)。その結果、他学科の学生とくらべ、相対的に、心理学科の学生の回答パターンは心理学者の回答パターンと類似していることがわかる。なかでも、心理学科の 1 回生の男女よりも、心理学科の 2 回生以上の男女の心理学観は心理学者のそれに類似している。これは、学科の専門教育によって学生の心理学観が変容する事を示唆している。

(2) 正準判別分析

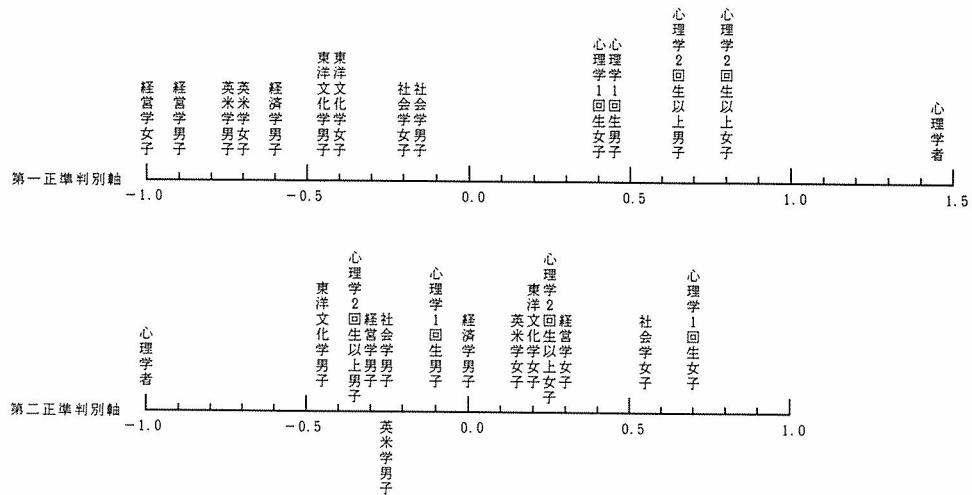
各群間の心理学観の違いを簡潔に表現するために、正準判別分析をおこなった。正準判別軸は近似 F 統計量の検定結果によれば、第 4 位までが 1% 水準で有意である。しかし、解釈可能性および累積寄与率を考慮した結果、第 2 位までの判別軸を有意な次元として取り上げることとした。

結果を Table 3 および Fig. 1 にしめす。正準構造値によれば、第一判別軸は、「Q 5. 心理学は科学的である」、「Q 1. 心理学に興味がある」に正の相関をもち、また「Q 8. 心理学は古いと関係が深い」、「Q 7. 血液型で性格がわかる」、「Q 6. 心理学は文系である」に負の相関を示している。判別得点の平均値をプロットした Fig. 1 によれば、心理学者群をプラス方向の最端に位置づけ、ついで、心理学科の 2 回生以上の男女、心理学科の 1 回生の男女を位

Table 3 心理学観を測定する 15 項目をもちいた正準判別分析 (正準構造値)

項 目	第一正準判別軸	第二正準判別軸
Q 1 心理学に興味がある	517	483
Q 2 心理テストに興味がある	072	597
Q 3 心理学は神秘的である	-338	631
Q 4 心理学は役に立つ	441	256
Q 5 心理学は科学的である	600	093
Q 6 心理学は文系である	-455	-142
Q 7 血液型で性格がわかる	-447	531
Q 8 心理学は古いと関係が深い	-499	188
Q 9 頭の良し悪しは知能テストでわかる	188	-173
Q10 心理学を学べば、人の心を読めるようになる	-269	-049
Q11 心理学を学べば、相手の性格がわかるようになる	-177	-083
Q12 心理学を学べば、自分の心がわかるようになる	013	293
Q13 心理学を学べば、自分の悩みが解決できる	164	280
Q14 心理学を学べば、人づきあいがうまくなれる	-065	242
Q15 心理学を学べば、異性にもてる方法がわかる	-114	032

注) 小数点省略



注) 図中では、イギリス・アメリカ語学文学科は英米学と略記している。

Fig. 1 各群の正準判別得点の平均値のプロット

置づけている。マイナス方向には、心理学科以外の男女学生の各群が位置づけられている。そこで、この判別軸は心理学に科学的関心および心理学の科学的な知識を持っているか否かで、各集団を判別する軸であると解釈される。また、心理学者群から多少隔たりをもつとはいえ、心理学科の2回生以上の男女は、心理学科の1回生男女や他学科の学生よりも、心理学を科学としてみる傾向があり、心理学者の見方に近づいているように思われた。これは、学科の専門教育の結果とみることができよう。

第二判別軸は、「Q3. 心理学は神秘的である」、「Q2. 心理テストに興味がある」、「Q1. 心理学に興味がある」、「Q7. 血液型で性格がわかる」に正の相関を示す。Fig. 1によれば、心理学者群をマイナス方向の最端に位置づけ、ついで、各学科の男子学生の群がマイナス方向に位置づけられている。プラス方向の最端には心理学科の1回生の女子を位置づけ、各学科の女子学生の群もプラス方向に判別されている。

この判別軸は、素朴かつ通俗的で、占いの志向を交えた心理学への興味を測定する軸と考えられる。もちろん、心理学者は、そのような傾向はもっとも弱い。一方、心理学科の1回生の女子は素朴な心理学への関心が非常につよいといえる。ここに、われわれは教員と心理学科の1回生女子学生との心理学観の大きな差異をみることができる。また、この判別軸上ではマイナス方向に心理学者と男子学生を位置づけ、プラス方向には女子学生を位置づけている。これは血液型性格占いを信じたり、通俗の心理学へ関心を示す傾向が女子学生において強いことを示唆する結果と考えられる。

3. 考 察 —— 心理学者と大学生の心理学観の差異について ——

Kimble (1984) によれば、心理学者の中にも、心理学が科学性を志向すべきか、人間学的視点を志向すべきかという認識論上の違いが、認められるという。ここでは、サンプル数及びアンケート項目の測定内容の制限のために、心理学者の専門の違いによる心理学観の差異をみいだすことはできなかった。

しかしながら、専門が個々にことなる心理学者を一つのグループとみなした場合には、“プロ”としての心理学者と“しろうと”としての学生とのあいだには、心理学に対する考え方に大きな差異があることが確認された。まず、第一の違いは、心理学を科学としてみるか否かにあった。第2の違いは、通俗的な心理学を肯定するか否かの違いである。換言すれば、大学生の側からみると、心理学という学問は“科学”としては捉えられてはおらず、また彼らは“通俗的心理学”（血液型性格占いなど）を否定してはいないし、時には“学問としての心理学”と混同していることもありうるといえる。

したがって、われわれ教員が当面する課題は、これらの認識のギャップをいかにして埋めるかという点にある。しかも、その教育改善の努力は、単に誤った知識や偏った心理学観を矯正するだけにとどまらないと思われる。現在の心理学教育には何らかの本質的問題が伏在しており、その反省のもとにたって、新たな展開が必要な時期が到来しているようにも思われる。

3. 心理学教育に関する心理学者の意見

前節で明らかにしたような心理学観をもつ学生に対して、実際に講義をおこなっている心理学者らは、学生たちをどのようにみているであろうか。さらに、心理学教育に対して、どのような意見をもっているだろうか。

われわれは、今後の大学における心理学の授業の内容やあり方について、大学や病院等の関係諸機関に所属する心理学者に、自由記述により意見をもとめた。心理学教育の改善は急務となっている昨今、これらの意見は大変貴重なものである。そこで、できるだけ多くの意見を紹介し、読者の参考に供したい。通覧しやすいように、われわれは主観的な分類を便宜上おこなひ、若干のコメントを述べさせていただいた。なお、以下に掲載した意見の中には、できるだけ原文の意を損なわないように留意しながら、省略および編集をくわえたものもある。

(1) 心理学を受講する学生に関する意見

- ① 専門的知識がなく、また社会の問題にも関心が薄い学生にとっては、心理学は、占い・恋愛心理程度にしか考えられていないことが多い。
- ② 学生にうける授業にするためには、上記項目 10～15 が項目 5（付表 1 のアンケート項目

の番号を参照)であるかのように話さなければならないのかと悩むところである。

- ③ 一般の人や新入学生は、おそらく実用的な心理学(付表1のアンケート項目の9～15番のような)を求めているように思う。
- ④ 心理学に興味をもって入学してくる学生の多くは、TVや映画などによる誤った先入観や好奇心をもっている。一枚の絵からたちまち性格がわかったり、自閉症は心理的な原因が全てといったものではないことを理解してほしい。
- ⑤ 学生たちの「主な思い」は、「人の心のしくみ」がわかれば「人との付き合いがうまくできるのではないか」ということのように、彼らの「自分を傷つけずに、相手との関わりを有利に進めたい」という気持ちを感じる。「相手のこと」を分析して詳しく知りたいという欲求が強いわりに、「同じ人間である自分」も同じ理論で説明されることには無頓着な(あるいは気付いていない)ように感じる。
- ⑥ せっかちに心理学の効用を求めず、自己の日常体験の体系的理解にとどめること。その分では結構、効用はあるのだから。他者への興味ではなく、自己の問題から出発することも大切ではないか。
- ⑦ 心理学の専門家と「心理学」の受講生の心理学像にはかなりのズレがあることは予想される。「心理学」の講義によってこのズレが縮まることを期待する。その縮める手段として自らの専門家としての信念を売り渡してまで学生に迎合(オモネル)ような事があってはならない。

われわれの分析によって明らかにした大学生の心理学観の特徴を、講義を担当する心理学者の側も実感しており、何らかの困難や不満を感じていることがわかる。偏った心理学への期待と関心を持つ学生に対して、心理学を学ぶ意義などについて、教育者の立場からの貴重なアドバイスが示されている。

(2) これまでの心理学教育への反省——科学主義への批判を中心として——

- ① 科学的という原則に拘泥しすぎると人間の本質を見落とすこともある。主観的現象、内的体験の意味を再考すべきである。
- ② 心理学はヒトの「心」そのものを研究対象とする学問である。その意味で、学生の心の琴線に触れるような授業ができればよいと思う。授業のテーマとしてはヒトがその人生において直面するさまざまな人生問題をとりあげたい。
- ③ 現代の心理学の種々の分野の研究事例を示しながら方法論や考えを教えてはいるが、個人的には科学的な方向を指向するだけでよいのかという思いも抱いている。
- ④ 今日の心理学の多くは科学的厳密性を重視するあまり、現実の人間行動を理解する上で

有効でない。もっと現実の人間に則した内容にしなければ学生の興味を喚起しないであろう。

- ⑤ 大教室でのマス教育では心理学は教えられない。教員の数を増やし、学生を減らし、自由なディスカスの中で授業はなされるべきである。
- ⑥ 今の心理学は何処の国の何才ぐらいの人間を対象としての科学なのか全然わからないし、心理学の授業ではどんな人間の心理なのか具体的なイメージがわからないから授業方法やテキスト編集に猛省をうながしたい。今までの授業では心理学に未来はない。

(3) 科学的心理学を教授する事に関する意見

- ① 科学的心理学としての思考法（方法論を通じたものの見方・考え方）を身につけさせることが必要である。
- ② 心理学研究の基礎と科学としての考え方をしっかりと教えるべきである（基礎のない表面的な理解だけで心理学を学んだ気になっている学生が多すぎる）。
- ③ 学生の常識心理学と科学としての心理学とそのアプローチの仕方において異なることを伝えるべきである。むしろ講義内容より科学的態度による人間の見方とはどんなものかを伝えられるようにすべきだと思う。
- ④ 心理学の授業では、いわゆる世間常識としての人間行動の成り立ち方と「科学としての心理学」による人間行動の研究との関係を見出すような契機になるものでありたいと思う。しかし、大学の授業は実証性に裏付けされていることが必要であるので、俗説的説明を述べながら科学でないところを説明することに力をそそぐことになると思う。
- ⑤ 自分も含め、人の行動や意識について客観的に観察・理解しようとする姿勢が伝えられればと思っている。
- ⑥ 最近の受講生は「〇〇の心理学」とか「血液型と性格」についての各種の本を読んでいて、偏った心理学のイメージを持っている。それらを正すために、現在の実験や調査による新しい事実や知見（脳科学や臨床医学を含めて）を絶えず取り入れて、科学としての心理学を伝えていく努力が必要であろう。
- ⑦ 心理学はいろいろな専門領域に分化されすぎているので、そのことを念頭において、体系的に組織的に科学としての心理学のありかたを取り扱っていく必要があると考える。
- ⑧ 学習した知識を整理し正しく理解させるために、説明的方法と了解的方法、または法則定立的接近と個性記述的接近について、現在の人間科学としての心理学は知見の非累積的科学で、心理学的事実は特定理論の中でのみ意味をもつことを十分説明することが必要である。
- ⑨ 人間や動物の行動が、おおむね個体の生存に適応的であることに着目させ、それが進化

の歴史によって成り立っている事実をとらえるように教授すること。

- ⑩ 人間の脳と心を多面的な角度から捉え人間の理解を深めることに学生が興味を持つもの
と考える。

(2) および(3)をまとめてコメントをおこなう。

日本の心理学は戦後、行動主義(Behaviorism)の影響や、コンピュータの発達や数理科学の普及にともない、自然科学・厳密科学化を強く志向してきた。この志向は、形をかえながらも、現代の日本の心理学の伝統の中に科学的志向として根づいたように思われる。そして、何ものにもかえがたい個としての存在への主観的眼差し、たとえばヒューマニスティック心理学に代表されるような人間学的志向と、先に述べた科学的志向はなかなか相いれない現状にある。上記回答群の中からは、その現状がうかがい知れるように思われる。

これは、Kimble (1984) のいう心理学における2つの文化、すなわち科学的志向か人間学志向かといった、心理学者各自が共感する文化差の違いであり、解決を性急にもとめることはできない問題かもしれない。しかし、科学的志向にしる、その下位的要素である数量化志向にしても、さらには人間学的志向にしても、いずれの志向も現代心理学の重要な側面であり、また、人間理解のための重要な視点となっている。また、自由記述の中には、進化論的、生物学的視点も現代心理学の視点として加味する必要を述べた意見も見うけられた。このような現代心理学の多彩な志向とそれに基づく人間観を広く伝えることは、学生自身の人間観の拡大をはからしむる上で重要であると考ええる。

一方、学生は、現代心理学の科学的側面をあまり重要視しない傾向にある。科学的視点の意義を理解させることは、誤った心理学観や通俗的心理学の弊害をとりのぞく上で、非常に効果が高いと思われる。

(4) 教授方法・教授姿勢について

- ① 学生の関心を持続させ得ることを考えなければならない。実験室の知識をいかに現実行動と関係づけて授業するかがポイントとなる。研究者としての理論的なドグマティズムだけではいけないであろう。しかし自らの立場を明確にしておいて授業をしなければ何の力ももたない授業になるだろう。
- ② 総覧的な入門心理学よりも、教員それぞれの専門から、深いレベルの教育内容にすべきであり、入門期に内容を浅くすると学生の興味を失わせる。
- ③ 学生に「心理学への疑問・批判」という題でレポートを書かせてみると、素朴ではあるが基本的批判が結構ある。そのようなことをふまえながら新しい展開が可能な部分は展開しつつ、授業をしていくことが重要と考えている。

大学生の心理学観の構造 II

- ④ 心理学の知見と日常生活における具体的な経験とを結びつけて興味を持てるように心掛けている。
- ⑤ 心理学的法則を自ら見出すプロセスを体験させることが大切である。
- ⑥ 身近で興味あるテーマを選んで、具体的にわかりやすく、討議の中で学習していけるような授業が望ましい。
- ⑦ 専門領域の授業では、できるだけ最新の情報を提供し、またその領域での研究例・実験例などをわかりやすく説明できればと考えている。
- ⑧ 認知・学習の領域は視聴覚教材を多用して、興味をわかせる理解を深めさせることが必要であろう。
- ⑨ 新しい技術革新にともなう実験方法や講義のプレゼンテーションにも工夫があっべきである。

教育者としての姿勢や様々な工夫について大変参考になる意見が寄せられている。このような工夫の集積をはかり、講義内容や方法、カリキュラムや教室設備などに反映してゆくことが重要であると思われる。

(5) 問題解決学としての心理学を教える必要性に関する意見

- ① 現実の社会的な問題解決に心理学がいかに貢献しうるかという視点からも心理学の諸理論を説明する必要がある。
- ② 社会の諸問題の解決に心理学の立場からの研究が必要であることも教えたい。
- ③ 実学の立場から、現実の事故を可能なかぎり解明し、学生と共に事故原因を考えたい。
- ④ 社会病理的現象の解明と解決に資するために応用心理学もしくは実践心理学に関する授業は重要になると思う。
- ⑤ 現実生活の中でどのように応用し、役立てていくかを考えさせることが重要。
- ⑥ 学問としてだけでなく、常に日常レベルで関連づけられる応用力を身につけさせることも大切だと思う。

心理学が社会の諸問題の解決にどのように応用されているかを学生に伝えることは、専門家としての義務でもある。さまざまな現実の社会問題には人的要因が大きく関わっていることに気付かせ、その問題解決には心理学的な視点や方法論が必要であることを理解させなければならない。

(6) 制度的諸問題について

- ① 心理学が文学部（文科系）にのみ存在するという現状はのぞましくない。心理学の研究対象は広い範囲に渡っており、研究設備、学生の資質（例えば数学アレルギーがない）といった側面からも理学部に属する心理学ができてよいと思う。もちろん心理学の多くの部分は科学的にとりあつかうことは難しいので、これらは従来通り文学部に属すればよい。
- ② 高校段階で 100% 文系の受験勉強しかなかった入学生は今後の大学教育（心理学）に適応していくことが困難になるという点で心をいためている。
- ③ 人間の生物としての特徴をしっかり認識したうえで初めて人間の視覚・認知・発達などさまざまな研究が成り立つのではないかと考えている。そのためには動物生態学・解剖学・比較解剖学などをはじめ広義の生物科学を基礎的分野として学部・大学院を通じて勉強することのできるカリキュラムが必要であると考えている。

現代心理学の進展によって、専門領域の分化が生まれたことにともない、大学における心理学の位置づけも多様となり、今後カリキュラムや教育体制の見直しが必要となることも十分考えられる。

また、演習や卒業研究では高度の統計学やコンピュータ解析がかなり使用されるようになったが、その統計的意味を充分理解して使用している学生は極めて少なく、教育の効果や意味が空洞化しがちである。文系の勉強しかしていない大学生を、どのようにリトレーニングするかという問題は大学の現状のカリキュラムでは未だ対応しきれていない。

(7) 心理学の専門家を養成するための教育について

- ① 心理学を専攻する学生は、心理学的に考えるための議論ができるよう、その内容を工夫しなければならない（日本の学生が心理学で討論ができない）
- ② 教養としての心理学を充実しなければ、就業時の専門職試験等、職業としての心理専門家が生まれない。大学の発展のためにはより多くの心理専門職従事者がいて欲しい。
- ③ 心理学の専門職に就いて、生涯、研究をすすめていく基礎には、語学、統計的手法など高度なテクニックの獲得が必須であり、カリキュラムの充実が望まれる。
- ④ 基礎となる心理学的技法・方法論の習得および日常生活のなかからユニークな疑問を拾い出し、それを研究へと発展させることの出来る能力の育成が重要である。特に後者は今後ますます重要となる。
- ⑤ 基礎的事項に関する心理学的訓練は不可欠である。応用心理学の研究者も「精神物理学的方法」を無視しては力不足になると思う。今年は基礎心理学にかなり力点を置いた授

業を用意している。

- ⑥ フィールド調査や観察などの実証的手法の訓練（スキルトレーニング）を活用することが心理学の生き残る道である。
- ⑦ 3, 4年次の教育では、「身体を使って、面白さを実感できるもの」であるという性格を分らせるような工夫も必要である。
- ⑧ 臨床現場や社会で役立つ実習を多くとりいれるべきである。
- ⑨ 臨床の現場では理屈どおりにならないのが日常であり、その辺の複雑さを教えるべく、現場の人を大学の講師にもっと迎えたらどうか。
- ⑩ 「臨床心理学」に関して：神経症や精神病や不適応の人を対象とするものであるが、学生時代（特に学部時代）は健康な人々にインタビューして、その人たちの人生から学ぶことも必要不可欠である。

社会の養成に応えるような心理専門職の資格認定が正式に制度化される昨今、資格取得のためのカリキュラムを整備することは、緊急の課題となっている。カリキュラムだけでなく、専門的な知識と技術を備えた人材をいかにして養成するか、その実際の工夫が現在求められている。臨床心理士、産業カウンセラー、カウンセラー、キャリアカウンセラー、教員専修免許における学校心理学の認定、家庭相談士など多くの心理専門職の認定・制度化が進んでいることは、学部および大学院における心理学教育に、今後、大きな影響を与えるであろう。これらの点に対して、各方面の関係者の関心が強いことがうかがえる。

4. 結 語

心理学ブームやいわゆる教養科目の見直しの流れといった状況における心理学教育の諸問題へのアプローチとして、われわれは、まず大学生の心理学観の構造分析をおこない（東・橋本・加藤・藤本, 1994）、さらに本稿では、心理学者の心理学観と学生の心理学観を比較し、両者の間の心理学観の認識ギャップを明らかにすることを試みた。

これらの結果にもとづき、どのような教育を展開すべきか等、今後着手しなければならない課題は数多く残されている。この点に関して、各方面の心理学者からいただいた御意見から大変学ぶことが多く、今後の実践に役立てていきたいと考える。

付記：本研究の調査に御協力をいただきました方々に深く感謝の意を申し上げます。

〔参 考 文 献〕

東 正訓・橋本尚子・加藤 徹・藤本忠明 1994 大学生の心理学観の構造 追手門学院大学心理学論
集 第2号 1-7.

Kinble, G. A. 1984 Psychology's two cultures. American Psychologist 39 (No.8), 833-839.

付表1 心理学観を測定するために用いた15項目

次の項目について、あなたが心理学に対して抱いているイメージにあてはまる数字を○で囲んで
教えてください。

	は	や	も	や	は	
	い	や	ど	や	い	
			ち			
			な			
			い			
			ら			
			で			
1. 心理学に興味がある	5	4	3	2	1	興味はない
2. 心理テストに興味がある	5	4	3	2	1	興味はない
3. 心理学は神秘的である	5	4	3	2	1	神秘的ではない
4. 心理学は役に立つ	5	4	3	2	1	役に立たない
5. 心理学は科学的である	5	4	3	2	1	科学的でない
6. 心理学は文系である	5	4	3	2	1	理系である
7. 血液型で性格がわかる	5	4	3	2	1	わからない
8. 心理学は占いと関係が深い	5	4	3	2	1	関係はない
9. 頭の良し悪しは知能テストでわかる	5	4	3	2	1	わからない
10. 心理学を学べば、人の心を読めるようになる	5	4	3	2	1	ならない
11. 心理学を学べば、相手の性格がわかるようになる	5	4	3	2	1	ならない
12. 心理学を学べば、自分の心がわかるようになる	5	4	3	2	1	ならない
13. 心理学を学べば、自分の悩みが解決できる	5	4	3	2	1	ならない
14. 心理学を学べば、人づきあいがうまくなれる	5	4	3	2	1	ならない
15. 心理学を学べば、異性にもてる方法がわかる	5	4	3	2	1	わからない

1994年4月8日 受理